

ドラッグインフォメーション

平成 26 年 3 月改訂

販売名	オキシドール「ヨシダ」		製造販売	吉田製薬株式会社									
局方名	日本薬局方 オキシドール		発売年月	1961年1月									
洋名	Oxydol		薬価収載年月	1961年1月									
一般名	オキシドール		薬価	10mL 7.70	健保適用								
剤形	液剤		日本標準商品分類番号	872614									
規制区分	普通薬 日局		厚生労働省薬価基準収載医薬品コード	2614700X1379	YJコード								
性状	本剤は無色澄明の液で、においはないか、又はオゾンようのにおいがある。本剤を放置するか、又は強く振り動かすとき、徐々に分解する。本剤は酸化剤又は還元剤と接触するとき速やかに分解する。 本剤はアルカリ性にするとき、激しく泡立って分解する。光によって変化する。 pH:3.0~5.0 比重 $d_{20}^{20}$ :約 1.01												
組成	過酸化水素 2.5~3.5w/v%含有する。 添加物としてフェナセチンを含有する。												
効能・効果 用法・用量	<table border="1"> <thead> <tr> <th>効能・効果</th> <th>用法・用量</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>創傷・潰瘍の殺菌・消毒</td> <td>創傷・潰瘍:原液のままあるいは2~3倍に希釈して塗布・洗浄する。</td> </tr> <tr> <td>外耳・中耳の炎症、鼻炎、咽喉頭炎、扁桃炎などの粘膜の炎症</td> <td>耳鼻咽喉:原液のまま塗布、滴下あるいは2~10 倍(耳科の場合、時にグリセリン、アルコールで希釈する)希釈して洗浄、噴霧、含嗽に用いる。</td> </tr> <tr> <td>口腔粘膜の消毒、齶窩及び根管の清掃・消毒、歯の洗浄、口内炎の洗口</td> <td>口腔:口腔粘膜の消毒、齶窩及び根管の清掃・消毒、歯の洗浄には原液又は2倍希釈して洗浄・拭掃する。口内炎の洗口には 10 倍希釈して洗口する。</td> </tr> </tbody> </table>					効能・効果	用法・用量	創傷・潰瘍の殺菌・消毒	創傷・潰瘍:原液のままあるいは2~3倍に希釈して塗布・洗浄する。	外耳・中耳の炎症、鼻炎、咽喉頭炎、扁桃炎などの粘膜の炎症	耳鼻咽喉:原液のまま塗布、滴下あるいは2~10 倍(耳科の場合、時にグリセリン、アルコールで希釈する)希釈して洗浄、噴霧、含嗽に用いる。	口腔粘膜の消毒、齶窩及び根管の清掃・消毒、歯の洗浄、口内炎の洗口	口腔:口腔粘膜の消毒、齶窩及び根管の清掃・消毒、歯の洗浄には原液又は2倍希釈して洗浄・拭掃する。口内炎の洗口には 10 倍希釈して洗口する。
効能・効果	用法・用量												
創傷・潰瘍の殺菌・消毒	創傷・潰瘍:原液のままあるいは2~3倍に希釈して塗布・洗浄する。												
外耳・中耳の炎症、鼻炎、咽喉頭炎、扁桃炎などの粘膜の炎症	耳鼻咽喉:原液のまま塗布、滴下あるいは2~10 倍(耳科の場合、時にグリセリン、アルコールで希釈する)希釈して洗浄、噴霧、含嗽に用いる。												
口腔粘膜の消毒、齶窩及び根管の清掃・消毒、歯の洗浄、口内炎の洗口	口腔:口腔粘膜の消毒、齶窩及び根管の清掃・消毒、歯の洗浄には原液又は2倍希釈して洗浄・拭掃する。口内炎の洗口には 10 倍希釈して洗口する。												
配合変化	アルカリ、ヨウ素、過マンガン酸塩などの還元剤により分解する。金属、金属塩、光、攪拌、熱により分解は促進され、極微量の酸は共存下において、安定する。												
薬効薬理	使用濃度において細菌に有効であるが、その作用は緩和で持続性がない。発泡による機械的清浄化作用がある。グラム陽性菌、グラム陰性菌、酵母、ウイルスに有効である。オキシドール(過酸化水素水)の過酸化水素から生じるヒドロキシラジカルにより細胞膜、DNA などが損傷を受けることが作用機序と考えられる。												
使用上の注意	<table border="1"> <tr> <td>                     【禁忌(次の部位には使用しないこと)】                      瘻孔、挫創等本剤を使用した際に体腔にしみ込むおそれのある部位                 </td> </tr> </table> 1. 重要な基本的注意 長期又は広範囲に使用しないこと。 2. 副作用 本剤は使用成績調査等の副作用発現頻度が明確となる調査を実施していない。 (1) 重大な副作用 空気塞栓(頻度不明): 空気塞栓を起こすことがあるので、循環動態に異常を認めた場合など空気塞栓が疑われる症状が見られた場合は、速やかに本剤の使用を中止し、適切な処置を行うこと。 (2) その他の副作用 <table border="1"> <tr> <td>口腔</td> <td>適用により口腔粘膜刺激(頻度不明)</td> </tr> </table>					【禁忌(次の部位には使用しないこと)】 瘻孔、挫創等本剤を使用した際に体腔にしみ込むおそれのある部位	口腔	適用により口腔粘膜刺激(頻度不明)					
【禁忌(次の部位には使用しないこと)】 瘻孔、挫創等本剤を使用した際に体腔にしみ込むおそれのある部位													
口腔	適用により口腔粘膜刺激(頻度不明)												

使用上の注意	<p>3. 適用上の注意</p> <p>(1) 人体</p> <p>1) 投与経路 外用にのみ使用し、内服しないこと。</p> <p>2) 使用時 ア. 眼に入らないよう注意すること。入った場合には水でよく洗い流すこと。 イ. 易刺激性の部位に使用する場合には、正常の部位に使用するよりも低濃度とすることが望ましい。 ウ. 深い創傷に使用する場合の希釈液としては注射用蒸留水か滅菌精製水を用い、水道水や精製水を用いないこと。</p> <p>4. その他の注意 長期大量経口投与によりマウスの十二指腸に腫瘍の発生が認められたとの報告がある。</p>
取扱上の注意	<p>貯法: 遮光した気密容器にいれ、30℃以下で保存する。 包装単位: 100mL、500mL</p>
文献請求先	<p>吉田製薬株式会社 学術部 東京都中野区中央5-1-10</p>